

小野谷照著

『帝国日本と朝鮮野球』

——憧憬とナシヨナリズムの隘路——

高嶋 航

本書は『朝鮮独立運動と東アジア一九一〇—一九二五』（思文閣出版、二〇一三年）の著者による二冊目の単著である。独立運動史の研究者が野球の本を出すということを不思議に思う人がいるかもしれないが、植民地においてスポーツと独立運動が結びつくことは決して珍しいことではない。しかしそうした研究は往々して両者の結びつきを強調しすぎるきらいがある。これに対して本書は日本への憧憬と反日ナシヨナリズムの間で葛藤する朝鮮野球の姿をバランス良く描いている。さっそく本書の内容を概観しよう。

まえがきによると、本書執筆の契機は、二〇〇六年のワールド・ベースボール・クラシックに対する韓国人の熱狂を目にしたことにあつた。韓国チームの活躍は『韓国野球一〇一年史』における最高の業績」と称えられ、これ以降、野球の国民スポーツ化、それと裏返し脱日本化が進行する。具体的には、過去と現在の見直し、すなわち韓国野球のルーツ探しと野球用語の改定が進められるが、アメリカから伝わったはずの韓国野球に、なぜ日本が絶大な影響を及ぼしてきたのかという点は論じられていない。本

書目的は植民地時代を中心に、朝鮮社会で野球がどのような役割を果たしたのか、日本野球との関係はいかなるものであつたのかを歴史学的に明らかにすることである。

序章「変化する野球用語」は用語とナシヨナリズムの問題を論じる。朝鮮では日本の漢字語由来の言葉「야구」をベースボールの訳語としている。これに対して、中国では「棒球」と呼んでいる。朝鮮でも中国でも近代に大量の日本漢語が取り入れられるが、朝鮮のほうが依存度が高い。独立後、韓国では言語の面でも脱日本化（脱植民地化）、すなわち漢字の不使用と固有語の比率を高める取り組みがなされた。スポーツ用語の純化も試みられているが、日本語の影響を完全に排除することは難しい。

日本に野球が伝わったのは一八七〇年代で、当初は「ベースボール」と呼ばれていた。中馬庚が「野球」という語を提案したのは一八九五年である。一八九六年に一高が横浜のアメリカ人チームに勝利したことはナシヨナリズムを高揚させた。それは國粹主義と欧化主義批判の台頭という時代の一コマでもあつた。武道に対する評価の高まりと反比例してベースボールに対する批判が高まったが、愛好者たちはベースボールを日本化することで批判に応えた。その結果が「野球」という訳語の定着であつた。

第一章「ベースボールの伝来と野球の普及——韓国併合前」では、従来の定説を批判しつつ、黎明期の野球史を整理する。二〇〇六年が「二〇一年」目とされたように、従来朝鮮野球の起源は一九〇五年にアメリカ人宣教師ジレットが皇城YMCAの朝鮮人に野球を教えたことに求められてきた。この『大韓体育会史』（一九六五年）の説は大島勝太郎『朝鮮野球史』（一九三二年）

のいう「明治三十七年頃」（一九〇四年頃）に依拠し、換算ミスで一九〇五年となったものである。この間違いが何十年にもわたって通用したことは、韓国で自国の野球史がいかに軽視されたかを象徴している。

一九〇三年に皇城YMCAが設立され、翌年にジレットが野球を紹介したが、それはYMCAの会員にとつて、西洋文明に接する一つの機会にすぎなかった。ところが、大韓帝国の保護国化の進展にともない、皇城YMCAは愛国的団体へと変容し、野球にも新しい意義づけが与えられる。この時期に發生した愛国啓蒙団体は「民族の身体」を国権回復の鍵と見た。野球は宣教師にしてみればスポーツ振興の一環にすぎなかったが、朝鮮人にとつては日本に対抗するためのものだった。

このころベースボールは「打球」「擊球」「野球」と訳されていた。一九〇九年、日本から朝鮮人留学生チームが最新の野球技術や道具を携えて朝鮮各地を回った。これを契機として「野球」が朝鮮語メディアを通して広まった。留学生チームを派遣した大韓興学会は愛国啓蒙団体であり、日本の支配に抵抗する運動が朝鮮における野球の日本化を促進したことになる。

第二章「暗黒時代——武断政治下の野球界」は武断統治期にも皇城YMCAや私立高等普通学校が愛国啓蒙運動のスポーツ熱を継承したこと、一方で官立高等普通学校では朝鮮総督府の教育方針との関係でスポーツ活動がほとんど見られなかったことが論じられる。在朝日本人は早くに野球チームを結成していたが、一九一二年夏、その一つ東洋協会専門学校京城分校に皇城YMCAが試合を挑んだ。自信をつけた皇城YMCAは同年一月に日本遠

征を敢行した。早大野球部は格下の相手と対戦するだけでなく資金援助までしたが、それは安部磯雄部長の野球を通じた国際交流の理念の実践であった。

皇城YMCAの活躍に焦りを感じた在朝日本人は官民一体となつて野球の振興を図る。その中心を担ったのが総督府鉄道局と総督府の御用新聞『京城日報』だった。鉄道局では一九一二年に野球倶楽部が結成され、翌年春に早大の萩野喜代志を入局させるが、この新しい発想のきっかけは朝鮮人チームへの焦りや対抗心だった。

一九一四年に鉄道局の龍山倶楽部と朝鮮人チーム五星倶楽部との試合がおこなわれた。この試合にサヨナラ勝ちした五星倶楽部の選手に対し日本人観衆が暴行、朝鮮人側が応酬し、双方に負傷者を出す事件が起こった。日朝間の野球の試合は民族の自尊心を賭した戦いとなっていた。

大阪朝日新聞社は一九一五年に全国中等学校野球大会を創設する。早くもその翌年には朝鮮地区予選を企画し、朝鮮人学校も三校参加する予定だった。しかし予選の直前に総督府学務局が参加を阻止した。その背景には前述の暴行事件があった。総督府は内鮮融和より治安維持を優先したのである。

第三章「民族の発展は壮健な身体から」——文化政治期の朝鮮野球界（一）は、一九二〇年代のスポーツの発展に対する日本の影響を論じる。文化政治への転換をもたらした三・一独立運動は、朝鮮が国際社会から独立を認められるには実力不足であるという認識を再確認する過程でもあった。朝鮮人は言論、結社、集会の自由を認められ、一九二〇年四月一日に朝鮮語新聞『東亞

「日報」が創刊される。同紙は社説でオリンピックに参加できないのは「自らの権利を使っていない」からだと論じた。民族運動はオリンピックに参加できるだけの實力を持った民族か否かという指標と結びついた。この課題に応えるべく、同年七月に朝鮮体育会が設立された。その創設者の多くは日本留学経験者で、同会の活動は日本のスポーツの影響を拡大させることになった。

朝鮮体育会は同年一月に全朝鮮野球大会、翌年二月に全朝鮮蹴球大会を創設する（いずれも第二回大会以降東亜日報社が後援）。全朝鮮野球大会はさまざまな点で「朝鮮人版」の全国中等学校野球大会だったが、京城でしか開催されなため地方チームの参加が難しく、また試合数も少なく、「劣化版」の全国中等学校野球大会だった。一九二五年に日本人側の主導で朝鮮神宮競技大会が創設されると、朝鮮体育会はそれと同日程で全朝鮮野球大会を開催し、植民地政策に対抗した。当初親日団体の機関紙だった『朝鮮日報』は一九二四年に独立運動家申錫雨がその経営権を握り民族運動の一翼を担うようになると、東亜日報社に対抗してスポーツ大会開催に力を注ぎ、一九二五年に全朝鮮中等学校野球リーグを創設した。

朝鮮人留学生が野球に着目したのは、それが日本で最も人気のある「国民的スポーツ」だったからである。朝鮮人は野球を「民族的スポーツ」にしたが、一九二五年以降、朝鮮人の野球イベントは衰退し、サッカーが野球に代わって「民族的スポーツ」となる。しかしこれは野球の衰退を意味するのではない。ますます多くの学校が全国中等学校野球大会を目指すようになっていた。

第四章「帝国日本の野球イベント——文化政治期の朝鮮野球界

(2)は、朝鮮野球が帝国日本に組み込まれる過程を論じる。一九二三年の第九回全国中等学校野球大会は台湾が参加するとともに、初めて朝鮮人学校が参加したという点で、大会が帝国日本の大会となった瞬間だった。今回予選に初参加した微文高等普通学校は決勝で朝鮮中等学校野球界の覇者京城中学校を破り、本大会に出場した。大阪朝日新聞社はこの大会を内鮮融和の空間として積極的に演出した。微文の活躍を契機として、朝鮮人の生徒も甲子園に最高の価値を見出すようになり、朝鮮地区予選で朝鮮人学校の数が日本人学校を上回るようになる。対照的に、全朝鮮野球大会は衰退していった。

朝鮮地区予選を参加校数と日本人、朝鮮人、混合チームという民族別から見ると、一九二六年までは朝鮮人学校の参加は一枚にとどまるが、一九二七年から内鮮共学、公立普通学校の増加という学校政策の影響で朝鮮人チームと混合チームが増加、一九三一年から朝鮮半島の四地区で一次予選が開催され地方の学校が参加しやすくなると朝鮮人チームが激増、ついに三六校となった。大阪朝日新聞社と熾烈な競争をしていた大阪毎日新聞社も地方の大会を創設し野球熱を煽った。だが、地区予選の隆盛を、大阪朝日新聞が演出した内鮮融和の物語を朝鮮人が受け入れた結果と見ることはできない。日本人と朝鮮人の対抗意識は依然強かった。

一九二七年に始まった都市対抗野球大会は社会人野球の人気を高めた。朝鮮の社会人チームは積極的に朝鮮人選手を採用し、日米野球の全日本軍に選ばれた李榮敏のようなスターも現れた。朝鮮の政府機関や企業が朝鮮人選手を採用したのは、朝鮮統治の成果や企業を宣伝するためであり、また日本人選手より定着率が高

いからであった。PRに利用されたとはいえ、朝鮮人選手は民族イベントとのつながりを重視し、朝鮮人を代表する意識を持ち続けた。

一九三二年に文部省がいわゆる野球統制令を出すと、総督府学務局も同様の統制令を出し、その結果、朝鮮体育会主催の全朝鮮野球大会が消滅した。韓国では、この統制令は私立学校の生徒が全朝鮮野球大会に参加できないようにするため実施され、その結果「野球の沈滞」が始まったと考えられているが、実際には同大会はすでにサッカーなどスポーツの多様化や甲子園人気のなかで風前の灯火だった。

第五章「戦時期朝鮮の野球界」は総督府学務局の統制の拡大とその影響を論じる。京城中学校では一九三七年に校長の方針により武道以外の運動部の対抗試合が廃止された。名門校での部活動の戦時体制化は他校のモデルケースとなるが、自主的なもので、朝鮮人に対する影響は限定的であった。総督府はこの時期野球を同化政策に活用することに熱心になっていた。日中戦争勃発以降、一連の皇民化政策が実施され、内鮮融和ではなく内鮮一体が統治目標となった。甲子園の朝鮮地区予選も学務局により皇民化と戦時体制化が進められるが、「スポーツ用語の国語浄化」のようにスポーツの戦時体制化は日本以上に徹底していた。

一九三九年に学務局長は選手制度の廃止と虚弱な学生生徒の体力増強を訴えたが、これは朝鮮におけるスポーツの終わりの始まりであった。学務局の意を汲んだ校長たちの決断、あるいは硬式から軟式野球への転向の結果、朝鮮地区予選参加校は一九三九年に二六校になった。一方、民族教育をおこなう朝鮮人の私立学校

は硬式野球を続けた。

一九四二年、朝鮮総督府はスポーツへの統制を強め、朝鮮体育振興会を設立した。各学校では球技全般が禁止された。一方、社会人野球は隆盛を極め、一九四〇年と四二年の都市対抗野球大会で全京城が優勝したが、四二年秋のリーグ戦が植民地朝鮮最後の野球イベントとなった。

終章では、日本野球のありとあらゆる要素を吸収しながら、ナショナルイズムをエネルギーとして拡大したものの、それが朝鮮野球だったと結論する。

スポーツ史における本書の位置づけは著者自身が「朝鮮スポーツ史に関する日本語で読める学術書としては、おそらく最初のものである。韓国でも類書はほとんどない」と述べる如くである。朝鮮スポーツ史の先行研究と比べてみれば、いかに著者が多くの史料を発掘し、独自の（しかし説得的な）解釈を積み重ねて、植民地時期朝鮮の野球の全体像を描き出したかがよくわかる。また民族運動史から見ても新局面を切り開いたのではないだろうか。ただこの点に関して、一九二〇年代以降の叙述では野球と民族運動の関係が今ひとつはつきりしないように思える。野球にこだわらず、民族運動との関係が深いサッカーやボクシングなどに対象を広げてもよかつたのではないだろうか。

さて、評者は東アジアのスポーツ史を研究しているが、朝鮮の野球やスポーツについては著者以上の知見がないので、ここでは外野席から朝鮮野球をもう少し大きな文脈に位置づけてみたい。本書の主題は帝国日本と朝鮮野球であるが、満洲を加えることで、より立体的な構図を描くことができるのではないか。本書で

も朝鮮総督府鉄道局が一時期満鉄に経営を委託し、その結果従業員
の文化や厚生施設が充実したこと（二一九―二三〇頁）、また
日本運動協会の朝鮮と満洲の遠征に力を入れたこと（二五六―二
五七頁）が指摘されるが、満鉄もしくは満洲についてそれ以上の
記述はない。

内地の日本人チームは朝鮮遠征のさい満洲に立ち寄ることが多
かった。いやむしろ満洲遠征のついでに朝鮮に立ち寄ることのほ
うが多かった。この手の遠征の最初は一九一六年の天狗俱樂部で、
満洲各地を回ったあと朝鮮を素通りして帰った。本書でも触れら
れるように、その翌年に早大が朝鮮に遠征する（一四八―一四九
頁）。しかしこれはもともと満洲側が早大の校友会に依頼して実
現した企画であり、朝鮮の新聞社が日本から招聘したというより
は、満洲側の企画に便乗したというべきであろう。このときの早
大遠征メンバーのエースは岸一郎だったが、翌年に満洲俱樂部入
りする^①。朝鮮では岸より一年早く早大の萩野喜代志が鉄道局に入
ったが、それは朝鮮人チームへの焦りや対抗心だったという（一
二八頁）。いずれも体育会系就職^②の場合と同じ日本人チーム大連実業団への対抗心からであった。

六七―六八頁では朝鮮体育デーに触れ、文部省の「全国体育
デー」は一月三日だが、朝鮮ではその時期は運動するのに寒す
ぎるので、のちに一〇月一日に変更されたとする。第一回体育
デーは一九二四年で、朝鮮では一九二六年に期日変更がなされた
ようだが（九五頁注五六）、じつは満洲では一九二五年に気候の
関係で一か月繰り上げて実施されていた。朝鮮はそれに倣ったの
かもしれない。

第四章では、朝鮮における大阪朝日新聞社と大阪毎日新聞社の
対抗関係が地方の野球熱を高めたことが記される。両者の対抗関
係の影響は満洲にも及んでいた。たとえば、一九三一年六月に大
阪朝日新聞社安東通信部の後援で国境中等学校野球大会が創設さ
れると、同年八月には国境毎日新聞社が満鮮中等学校選抜野球大
会を開催した。中等野球に限らず、少年野球や社会人野球、さら
には各種スポーツ、武道は、満洲と朝鮮の間で密接な関係を有し
ていた。

野球そのものにはあまり関係ないが、東アジアという視点につ
いて述べたい。六六頁では、バスケットボールを紹介したのが皇
城YMCAのジレットで、日本より早かったことが記される。中
国ではもう少し早く、一八九五年に天津YMCAのライアンが紹
介していた。したがってこの時差は日本と朝鮮における近代文明
受容の問題というより、YMCAの東アジア戦略という視点で理
解すべきであろう。

YMCA関連では、六三頁に一八四四年に創立されたYMCA
の主な活動として「教育や文化、スポーツなどを振興させる」こ
とが挙げられるが、スポーツの振興は一九世紀末に登場した新し
い活動であった。それはキリスト教布教の重要な手段と考えられ
たので、「皇城YMCAが運動会を開いたり体育部を発足させたり
したことは、宣教師してみればスポーツ振興の一環にすぎなか
った」（七〇頁）というのは正しくない。また皇城YMCAの
日本遠征を早大野球部が支援した理由（二二三頁）については宗
教的な繋がりも見逃せない。野球部長安部磯雄はクリスチャンで
あった。彼はちょうどこのとき極東体育協会会主事のエルウッド・

ブラウン（マニラYMCA）の依頼を受けて、一九一三年に開催される極東大会の日本代表派遣の責任者をしてい^④た。

一八九頁では、朝鮮体育会が全朝鮮野球大会をシースンオフの一九二〇年一月に開催した理由を世界の時流に遅れまいとする焦燥感に求めるが、より具体的な理由があった。朝鮮体育会は翌一九二一年五月に上海で開催される極東大会に「Korea」として参加するべく、同年一月に申請をしており、そのための実績づくり^⑤だった。

一七四―一七五頁では一九二〇年夏に朝鮮を訪問したアメリカ議員団が朝鮮は独立のための「実力」を欠いていると認識し、それを朝鮮人は天の声のごとく受け止め実力の向上を目指したとある。この議員団はアメリカの植民地フィリピンにも足を運んでいた。フィリピンでもスポーツが独立あるいは自治の基準と考えられていた^⑥。議員団の言葉の矛先はじつはフィリピンにも向けられていたのである。そのフィリピンは一九二四年にオリンピック参加を果たした。一七六頁では、一九一四年のIOC会議で主権を持たない民族が単独の団体として参加することはできなくなり、朝鮮人は民族単位で参加する権利がなかったと記す。著者が参照した福田宏によれば、この問題はチェコとフィンランドに関わるものだし、そもそも朝鮮人がこのことを知っていたとは思えない。評者はかつて中国のスポーツ用語が日本と違うのは、YMCA関係者が日本の影響力を排除するために意識的に差別化を図った結果だと論じた^⑦。ここで台湾について少し補足しておく、国民党支配下の台湾では中国のスポーツ用語の使用が強制された^⑧。とするなら、戦後の韓国、朝鮮の脱植民地化を考えるうえで、台湾

との比較も興味深い。

評者は本書の基礎となる論文に目を通してきたが、今回一冊の本になったことで、改めて多くのことに気づかされた。評者は最近満洲スポーツ史の研究に着手したところだったので、満洲を抜きにして日本と朝鮮の関係を理解できない、あるいは朝鮮を抜きにして日本と満洲の関係を理解できない、ということを感じさせられた。著者は末尾で朝鮮スポーツ史研究の活性化につながると述べているが、本書の射程はそれにとどまらない。満洲については評者自身の責任であり、本書と対話可能な研究を早く出した^⑨と考えている。

① 岸以前にも獅子内謙一郎など早大野球部出身者はいたが、野球を主たる目的として入社したわけではなかった。

② 東原文郎「体育会系」就職の起源…企業が求めた有用な身体…「実業之日本」の記述を手掛かりとして「『スポーツ産業学研究』二二巻二号、二〇一一年。

③ 「満洲日日新聞」一九二五年九月二三日。

④ 拙稿「フィリピンカーニバルから極東オリンピックへ…スポーツ・民主主義・ビジネス」『京都大学文学部紀要』五六号、二〇一七年。

⑤ 拙著「帝国日本とスポーツ」瑞書房、二〇一二年、一八六―一八七頁（典拠は「申報」一九二一年二月二日）。Lee, Seok, "Colonial Korea and the Olympic Games, 1910-1945" (2016). *Publicly Accessible Penn Dissertations*. 1836 [http://repository.upenn.edu/dissertations/1836]. p. 32. 参照せよ（最終閲覧日二〇一七年三月九日）。

⑥ 拙稿「満洲国」の誕生と極東スポーツ界の再編」『京都大学文学部紀要』四七号、二〇〇八年。拙稿「フィリピンカーニバルから極東オ

リンピックへ」。

⑦ 福田宏『身体の国民化…多極化するチエコ社会と体操運動』北海道
大学出版会、二〇〇六年、第六章。

⑧ 拙稿「なぜ baseball は棒球と訳されたか…翻訳から見る近代中国
スポーツ史」『京都大学文学部紀要』五五号、二〇一六年。

⑨ Andrew D. Morris, *Colonial Project, National Game: A History of
Baseball in Taiwan*, University of California Press, 2011, pp. 58, 63.

(四六判 三四五頁 二〇一七年一月)

中央公論新社 一六五〇円)

(京都大学大学院文学研究科准教授)